

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	鈴木 智之
主 論 文 題 名 :				
文学雑誌『ワロニー』における地域主義的企図の生成と展開 ー文学制度・風景表象・社会言語的状況				
(内容の要旨)				
本論文は、ベルギー・リエージュにおいて刊行された文学雑誌『ワロニー (<i>La Wallonie</i>) 』(1886-1892)を対象として、主としてここに見られる「地域主義」的企図の生成と展開を、一方ではベルギーにおける国民的ないし地域的同一性の構築過程に、他方では文学場 (<i>champ littéraire</i>) におけるこの雑誌の位置の取得過程に関連づけながら、記述・分析しようとするものである。 1886年、当時まだリエージュ大学の学生であったアルベール・モッケル (Albert Mockel) を中心として創刊された『ワロニー』は、その後、急速に象徴主義の運動へと接近してゆき、ベルギーとフランスにおける代表的な象徴主義詩人が寄稿する文学雑誌へと成長していく。しかし、『ワロニー』は「前衛的象徴主義を代表する器官」として格段の成功をおさめただけでなく、他方においてももうひとつの企図を備えていた。それは、「ワロニー」という地域の文学・芸術を打ち立て、擁護しようとするにある。本論文ではこれを「地域主義的企図 (<i>projet régionaliste</i>)」と呼ぶ。 「地域の文学・芸術」を確立しようとするこの企ては、雑誌の成長と文学場における地位の確立とともにしだいに変質・後退し、二次的な位置へと押しやられていくことになる。しかし、その過程において、彼らがいかなる形で地域的同一性を構想し、それはどのような文学的形象に結びついていたのか。彼らの文学実践はいかなる社会的規定力に方向づけられ、また社会的な言説空間に何をもたらすことができたのか。その地域主義的な企図の展開は、象徴主義という美学的な自己規定の明確化とどのような関連をもっていたのか。さらには、地域主義的企図の形成と展開、あるいは後退のプロセスをどのような形で説明することができるのか。これが、検討されるべき一連の問題である。 この記述・分析課題の設定は、たがいに切り離すことのできない二つの社会学的関心に結びついている。ひとつは、国民的ないし地域的同一性の歴史的構築過程において文学言説がどのような位置を占め、社会ー文化的な境界設定のゲームにいかなる関与を示すのか、という問題。そしてもうひとつは、ひとつの文学圏 (あるいは文学場) の境界において制度的な周辺性を条件づけられた文学実践が、いかなる戦略的展開の中で自己の正統性の獲得をはかっていくことができるのか、という問題である。『ワロニー』がひとつの興味深い事例を提供しているのは、この雑誌がまさに、国家と地域の境界線、言語の境界線、そして文学の境界線の折り重なる地点に誕生し、それぞれの領域を主張しあう力の交錯の中に、みずからの位置を定めようとしているからである。 「序章」においては、雑誌『ワロニー』の成立をうながし、かつ規定した社会的状況を確認し、その社会的条件との関わりにおいて「文学実践」を記述・分析するための方法論的視角が提示される。				

『ワロニー』の刊行の背景には、その基底的条件として、ベルギーにおける石炭・鉄鋼産業の興隆と、それにとまなう中産階級の成長、その中での首都ブリュッセルと産業都市リエージュの競合関係があった。その上で、この国の人口の過半数を占めるフラマン語（フランデレン語）使用者からの言語使用の権利要求と、これを核とした民族主義的な主張の高まりがあった。その後のベルギー国の政治状況を規定することになる「言語問題」と「民族問題」が明確な形を取り始めたこの時期に、ワロンの若者たちは、あらためてみずからの帰属先を問い直し、「自分たち」の精神性を表出する文学・芸術を追求していった。『ワロニー』は、ベルギー社会が直面していたこの歴史的状況によって動機づけられた、地域的・民族的同一性の探求の「企図」として生まれたものである。

しかし、ベルギーにおけるフランス語文学の実践を対象化するためには、これをベルギー内在的な社会的文脈に結びつけるだけでは十分ではない。近代の文学・芸術は、政治・社会的状況の規定力に対して相対的に「自律的」な「場」の内部に展開されるものであり、その社会学的記述においては、「文学」を「文学」として成立させる特異な「制度」の力学が考慮されねばならない。そして、ベルギーのフランス語使用者たちの文学は、一国の内に閉じた「自立的」な「場」を形成しきれず、パリを中心としたフランス（語）文学の場、あるいは「世界文芸共和国」（カザノヴァ）の中に、その位置を模索していかなければならない。したがって、ベルギーの文学者たちは、国内的な政治・社会的状況に対して有意味な言説を産出するとともに、フランス（パリ）の正統化の審級による承認を獲得するという二重の課題、M. ビロンが論じた意味での「二律背反的な意味請求」に応えることが求められるのである。

「第1部：『ワロニー』における象徴主義と地域主義」（第1章～第4章）では、主として「文学制度論」や「文学場の理論」に依拠しながら、『ワロニー』における「地域主義的企図」の変遷過程をたどっていく。

まず、第1章においては、この雑誌の刊行の経緯を確認した上で、雑誌がその創刊当初にどのような「企図」を掲げていたのか、そのような企図の生成をうながした文脈はどのようなものであったのかを明らかにする。次いで、第2章・第3章では、「象徴主義」の美学をみずからの旗印として選択し掲げていく過程、およびそこに働いていた「社会的」規定力および「文学制度」の力学を解明する。そして、第4章では、この「象徴主義の器官」としての成長・成功との対において、『ワロニー』における「地域主義的」企図の行方（その縮小・周辺化と持続）がたどられる。

第1部を通じて明らかにされるのは、以下のような一連の事実である。

（1）フランス（語）文学圏の周縁（ベルギー／リエージュ）に拠点において、文学場への台頭をはかろうとするワロンの若者たちが、先行する他誌との競合の中で正統性の承認を追求していく上で、象徴主義と地域主義が、戦略的に取得可能な二つの立場として浮上してきたこと。

（2）その両者のあいだでの重心のバランスは、偶発的な出来事（あるフランスの雑誌の破産とその吸収）に左右されながらも、この時代のフランス（語）文学の「場の構造」と、雑誌の中心的な担い手たち、特にその主導者（A. モッケル）の保有する諸「資本」との関連によって条件づけられていたこと。

（3）その中で、『ワロニー』はしだいに地域主義的色彩を弱め、フランスとベルギーの象徴主義者が集結する場所という性格を強めていったこと。

(4) この戦略的展開は『ワロニー』のオリジナルメンバーのあいだに緊張関係をもたらすものの、「地域の文学」を確立し主張していこうとする企ては完全に潰えてしまうわけではなく、雑誌の中で周辺化されながらも継続していったこと。

「第2部：風景的同一性の構成」(第5章～第7章)においては、分析の中心を「文学表象論」の領域に移し、『ワロニー』に掲載されたテキストが、いかなる形で「地域」を描き、これを通じて「ワロンの文学」を実現しようとしていたのかを検討していく。その際、私たちが論述の中心にすえる主題は、「ワロンの風景」である。この雑誌に掲載された数多くの「地域主義」的作品は、くり返し「ワロニーに固有の、あるいは特徴的な風景」を語ろうとしており、その「風景の創出」の営為が、彼らの地域主義的な企図の核心に結びついている。

第5章では、文学・芸術表象を介して「風景が創出される」とはいかなる事態であるのか。またそれは、「地域の同一性」の感覚をどのような形で補完することになるのかについて、予備的な理論的な考察を提示し、記述の基本的な視座を設定する。第6章では、『ワロニー』に掲載された地域主義的なテキストの読解を通じて、「ワロンの風景」がいかに語られたのかを分析する。そして、第7章では、「ワロンの風景」の構成過程で、詩人(A. モッケル)と画家(A. ドネー)とがどのような相互作用の中でそれぞれの作品を産出していったのかをたどる。

第2部での考察からえられたのは、以下のような知見である。

(1) 「ワロン地方」および「ワロン人」の姿を語ろうとする作家・詩人たちの試みは、その作品ごとには固有の意味世界を構築しながらも、横断的にこれを展望してみると、類型的な同一性をもった「ワロンの(原)風景」を共同構築する作業となっていた。

(2) 彼らの描き出した「ワロンの原風景」は、その要素としては①川の流れ(ムーズ川)、②丘あるいは谷(傾斜地)、③森あるいは樹木、④青空と陽光、⑤農民、⑥(神話的または象徴的な)女によって構成される。それは必ずしも目に映るワロン地方の姿を偏りなく写し取ったものではなく、「選択的」な配置の上に成立するものである。一方においては、すでに現実のものとしてあったはずの「産業的」なもの(炭鉱や製鉄工場)が系統的に排除され、他方では、「フランドルの風景」との差別化の論理において、「起伏に富み」、「青空が広がり」、「豊かな森」の広がる大地というイメージが選択されている。

(3) さまざまな要素は、特定の偏りを帯びた「まなざし」のもとに、ひとまとまりの意味世界として構成される。「ワロンの風景」を構成するまなざしには、①民俗学的まなざし(今日の前に現前する世界を、過去の残像としてとらえる)、②観光のまなざし(現在の風景的世界を、来訪したよそ者の視点からとらえる)、③芸術のまなざし(先行する芸術作品の枠組みを介して、現在の風景を切り取っていく)という三つの特徴を確認することができる。

(4) こうしたまなざしの働きを介して、「風景」は、そこに「民族の精神」あるいは「魂」を宿す場として見いだされていく。そして、見えるものの背後に「見えないもの」を幻視する力をもつ者として「ワロンの芸術家」の自己規定がなされていく。「ワロンの風景」は、汎神論的または神秘主義的な心性を宿した「ワロン人」のまなざしの前に、その「魂」を体現する「象徴」としての価値を付与されていくのである。

(5) 『ワロニー』において構築されていった「ワロンの風景」は、周辺の視覚芸術家(画家)たちの作品との相互作用等を通じて、その後の時代に継承される「幻想」の雛形を準備することになる。

「第3部：社会言語的状況の中の『ワロニー』」（第8章～第9章）では、この雑誌における文学実践を、ベルギー・ワロン地方のフランス語使用者たちをとりまく「社会言語的状況（situation sociolinguistique）」との関わりにおいてとらえていく。

1880年代から90年代のベルギーにおいては、国民の過半数を占めるフラマン語（フランドレン語）使用者たちが、公的生活の場で「みずからの言語」を使用する権利を主張し、「言語問題」を核として、民族的・国家的な同一性と帰属が論争の焦点に押し上げられようとしていた。その中であって、ワロン運動の担い手たちは、フランス語の権威（文化的正統性）に依存しながら、国家（ベルギー国）の言語としてのその地位を守り、同時に自分たちの「地域」へのフラマン語の「侵入」を防ごうとしていた。この政治・社会的な動向と緩やかに結びつく形で、モッケルたちは「ワロン意識」の覚醒をうながし、「ワロンの文学・芸術」の固有性・同一性を確立しようとしていた。こうした文脈の中で、「フランス語使用」とは決して「無色透明」で「無垢」な所与の事実ではなく、「選択されざる選択」として、相応の政治・文化的意味を担うひとつの行為であった。

この点に着目して、第8章では、フランス語圏の「周辺」における「フランス語使用」の条件を「言語的インセキュリティ」という概念によってとらえ、ベルギー・リエージュを拠点とした文学実践の文脈を「言語場」の構造の中に位置づけていく。「フランスのフランス語」の規範的な地位と、これに対する自分自身のフランス語の隔たりの認識を前提として、「ベルギーのフランス語文学」は、その規範に対する極端な同調（純粋主義）と、その標準に対する過度の差別化（文体過剰）の両極に振れる傾向を示してきた。『ワロニー』の内部においても、A. モッケルを筆頭とする規範同調的な文体の探求と、C. ダンブロン（Célestin Demblon）を典型とする修飾過剰の傾向を見ることができる。

第9章では、『ワロニー』の寄稿者たちが「ワロン語文学」に向けたまなざしをたどりながら、地域の言語との関わりの中で、「フランス語で書くこと」の意味を検討する。「ワロン人」としての同一性の探求という課題を担いながら、『ワロニー』に集まった若き作家たちは「フランス語」の権威を前提とするところからしか文学実践に参入しえなかった。彼らは、同時代の「ワロン語文学」（地域言語による文学）に一定の関心を示しながらも、フランス語の「象徴的支配」を相対化する視点を獲得することはできず、「パリでも認められるフランス語の中に、ワロン人としての心性（魂）を体現する」という課題設定の中で自分たちの試みを追求していくしかなかった。

この2章を通じて、フランス語使用圏の地理的周辺という条件のもとに生まれる「言語場」の力学が、彼らの「文学」を方向づける基本的な規定要因となっていたことが確認される。

「終章」では、ここまでの考察の要約と、残されている課題の確認を行った。

『ワロニー』において展開された文学実践は、一方において「パリを中心とするフランス（語）文学の場」の構造に規定されながらも、「ワロン（人）」としての同一性の探求という課題に一定の答えを示そうとするものとして読むことができる。彼らの言表は、「ワロン」とは何か、「ワロンの芸術」とはどのようなものかについての「語り」の定式を生みだし、同時にこれを「ワロンの風景」の表象に結びつけて、目に見える形で「地域的同一性」の雛形を準備したとすることができる。しかし、その時代においても、また今日においても、「ワロン・アイデンティティ」については多くのことが語られながら、これが強固な地域的・民族的同一性の土台として共同化されているようには見えない。「言説」が「言説」のままに上滑りを起こし、提示されたモデルは「幻想」の雛形の域を出ることがない。そこには、アイデンティの言説的構成の「限界」また

は「蹟き」の一例を見ることができる。その理由は何であるのか。ここにひとつの重要な検討課題が残されている。

他方、「ベルギー文学」の社会学的記述という観点からは、「フランス文学の場」と、国家や地域に規定された「社会言説の空間」との、相互自立的で相互依存的な関係の記述が、歴史を縦断する形で試みられねばならないだろう。文学雑誌『フロニー』における集合的文学実践は、文学場と歴史・社会的状況との特異な接合（アーティキュレーション）の上に可能となったものであり、この社会的条件が持続的な定数として「ベルギー文学」を規定するわけではない。相対的に自律的なものとして変動していく二つの「言説実践空間」の、その時々々の接合関係を見極めながら、文学実践の社会史的記述を継続することが求められる。

